

奨励

ポケットに入れなくていい！

奨励	井口 智子 [いぐち・さとこ]
奨励者紹介	日本キリスト教団河内松原教会牧師

わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとし、見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しまば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜びます。

(コリントの信徒への手紙一 12章23—26節)

小さくしてしまうこと

皆さんのなかには新入生の方もいらっしゃると思います。ご入学おめでとうございます。新入生の方はいろいろと慣れるまで大変だと思います。ここにいらっしゃる皆さんは全員が、今年か、去年か、一昨年か、または数年前か、数十年前かには、みんな新入生を経験しています。私もそうです。6年前に京田辺校地で入学式に出席しました。今日、京田辺校地に歩いて歩いていると当時を思い出しました。

6年前の4月1日は日曜日でした。神学部の入学式は午後からでしたので、教会に行って礼拝に出席してから大学に行きました。大学に着いてから会場までの道のり、デイヴィス記念館まで遠いですよね。その道のりが、たぶん今年も同じだったと思いますが、サークル勧誘の花道みたくになっています。私のときもそうでした。ところが私がその花道を通るときだけは、サークルのたくさんの学生たちは全員休憩でした。

会場に近づくと、テキスト一覧表だったと思いますが「これをどうぞ」と、見たところ私と同年代らしき女性が新入生に声をかけていました。テキストと聞くと、「もらわない」と思っ手を出しました。すると「これは違うんです。学生だけです」と断られてしまいました。

そして会場の入り口でのことです。式次第、資料など、新入生と保護者と別でした。私の当時の年齢は50歳で見た目は保護者ですが、入学する本人なので新入生のコーナーに行くのと、「これは学生用です」とまたしても断られました。

ようやく会場に入り、どこの席に着くのかなと思いつつながら見渡すと神学部の立礼を見つけました。ただ私は3年編入生でしたので、編入生もここで良いのかと不安になり、会場内スタッフに聞きました。すると「ここじゃありません。ここは学生の席です。保護者は後ろの席に行ってください」と注意されました。

すると突然体が熱くなってドキドキしてきました。「私、きっとメチャメチャ浮いているんやわ」そう思い始めると、「あの人、間違えて座ってる」「なんで、あんなオバサンが座っているの」と、みんなに思われているような気がするのです。式が終わるころは、自分を恥ずかしいという思いと、私には場違いだったというように心はすっかり落ち込んでしまっていました。式が終わって、会場を出るときも花道を歩くように出ます。私は「誰にも顔を見られたくない」と思い、うつむいて、ただ床だけを見て歩いたことを思い出します。

こんな気持ちに陥って始まった大学生活は大変でした。最初にするのは時間割作りです。ところが、うまく作れない。勤労学生でしたから、バイトと両立する時間割を考えないといけないので大変でした。更に語学に自信がないので、基礎的な授業をとりたいたいのだけれど、そのような授業はほとんどが京田辺校地に集中していました。当時は3年生からは今出川校地だったので、これも大変でした。誰かに聞きたいけれど、入学式での体験がトラウマになっていて、誰にも話しかけることができなくて、事務室にすら行けなくて、他の学生ともひと言も話さず一人で、一人で悩んでいました。ますます、うつむいて校内を歩くようになり、とうとう食欲はなくなり、夜も眠れなくなってしまい急激に痩せてしまったぐらいです。そんなある日、大学に来たもののどうしたらいいのかわからなくなり、広い学食の隅この席で一人でぼーっと座っていました。そのとき、誰かが「井口さん」と私に声をかけてきました。見ると、以前キリスト教文化センターの公開講座「手話講座」で一緒だった学生が、偶然私を見かけて声をかけてくれたのです。その学生は落ち込んでいる私に、「年齢なんて関係ないですよ、自分は地方出身で慣れなくて、友人もなかなかできなくて、入学当初は不安で泣いていましたよ」と慰め励ましてくれました。そして安心して事務室へ行って相談すればよいと言ってくれました。その通りでした。事務室の職員の方は「何でも聞いて下さい。教授も捕まえては、どんどん聞けばいいですよ」と言ってくださり、時間割作りも一緒に考えて下さいました。

こうして無事に大学生活を始めることができたのですが、その学生から大切なことを気づかせてもらいました。その学生は、私にこのように言ったのです。「自分の親と井口さんは同年代です。その年齢でもう一度大学生をするなんて、キラキラして見えますよ」と。ところが実際の私は正反対でした。うつむいて、自分の存在を消すかのようにしていました。

「自分は場違いなところにいる。笑われているかもしれない。ここにいる若者たちと机を並べて勉強するような価値は私には無い」と。人間って不思議です。自分で自分をどんどん小さくしていくのです。

価値があること、

価値がないこと

今日の聖書箇所はパウロという人が書いた手紙の言葉ですが、入学当時の私にピッタリです。コリントの信徒への手紙という聖書箇所ですが、コリントというのは町の名前です。コリントの町は、大変栄えた華やかで裕福な町でした。いろんな施設があり、哲学者や社会的地位の高い人がたくさん住んでいました。しかし、人口の3分の2は奴隷の身分の人たちでした。コリントの町は、貧富の差、また教育の差も激しくて、明らかな二極化の町、格差社会でした。それがそのままコリントの教会内の姿でもありました。つまり教会のなかも格差社会の状況だったのです。

23節に「体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分」とあります。「恰好」と訳されている言葉ですが、これは原文から見ると「価値」という意味です。つまり「体の中で、ほかよりも価値がないと思われる部分」と読むことができます。では、体の中で価値のない部分なんてありますか。無いですよね。価値がないところが、体の中の部分はどれも全てが大切です。

パウロが言いたいこと、それは私たちみんな一人ひとり価値があるということなのです。私たちは一人ひとり違います。また一人ひとり個性があります。

その違い、その個性こそが価値あるもの、そして、それは神さまからいただいた賜物であるということをパウロは言っているのです。私たちは、誰もが神さまから賜物をいただいている価値ある存在であるということです。

先ほどお話ししたように、コリントの町は貧富の差が激しい町でした。

コリントの教会のなかも、そのまま同じ格差状態でした。特に貧困層の人たちは、学問を学べるような生活状態ではありません。自分たちは知識もない、何の働きもできない、何の役にも立たないと、自ら小さくなってしまっていました。

パウロはこのように教会内で、特に小さくなってしまっている人たちにメッセージを送りました。パウロは言っています。一人ひとは、価値のある一人ひとりなのだ。もう一人、私たちの身近な人が同じ意味の言葉を使っています。「人一人ハ大切なり」。新島襄の言葉です。私たち一人ひとり、みんな大切な存在なのだ。と新島襄も言っています。

ところで、「価値がある、価値がない」とは何を基準として決めますか。私たちは何を基準として、「価値がある、価値がない」と決めているのでしょうか。ちょっと思い巡らして欲しいです。どうでしょうか。「価値がある、価値がない」は「役に立つか、役に立たないか」で決めていることが案外多いのではないのでしょうか。それは、役に立ったかどうか、成果があったかどうか、ということですね。成果が測りの基準になっているのです。でも、成果で決める基準は不公平だと思いませんか。一人ひとりが違うということは、そもそものスタートラインから違います。同じスタートラインに立つとは限りません。

では、神さまの基準はどうでしょうか。私たちが考える価値基準とは違います。私たちが人間に対する神さまの基準は、「存在」なのです。「私たちの存在そのもの」なのです。私たちが、この地上に生きていくこと、存在していること、つまり私たち一人ひとりの「存在そのもの」に価値があるということなのです。

神さまの基準を知ると、私たちが生きていく上でとても重要です。「自分は生きていて価値があるんだよ。神さまは一人ひとりに賜物をくださっているんだよ。あなたと私の違っているところ、その違いは個性なんだよ。そして、その個性も神さまからの賜物なんだよ」ということなのです。

自分の存在そのものに価値があるのだということに気がつかないで、さらに、自分の個性を価値のないものだと思うと、目を伏せて、誰をも見ないで、人を見ないようにして、人と関わらないようにして、そして自ら端っこで小さくなって、ただ生きているだけの生活になってしまいます。そこには、配慮し合う生き方も生まれなければ、隣人愛もありません。

自分を愛すること、

隣人を愛すること

春学期チャペル・アワーの統一テーマは「隣人を自分のように愛しなさい」です。

私たちは自分自身の「存在そのものに価値がある」、「個性は賜物」ということに気がつかないで、「隣人を自分のように愛しなさい」は無理なこと。自分は価値がないと思っ、自ら小さくなってしまい、目を伏せていると人は見えません。人が見えなければ、人を愛することができません。まずは「自分は大切な存在なんだ」、このことをしっかりと受けとめることが大切です。「自分は大切な存在なんだ」と気がつくと顔を上げることができます。同時に、あの人、この人も、みんなみんなが見えてきます。そして、あの人、この人も、みんなみんなが、自分と同じように大切な存在なんだと気がつくことができます。だから自分を愛してください。自分は大切な存在なんだと気がついてください。

「存在そのものに価値がある」という神さまの基準に感謝する心が、私たちが自分とは違う他者の個性をも尊重し、また配慮し合う生き方となっていきます。お互いがそれぞれの個性を認め配慮して生きることが、「隣人を自分のように愛して生きる」ことに繋がっていくのです。

「オー！ゴッド」という映画があります。1977年の映画でちょっと古いのですが、ジョン・デンバー主演のアメリカ映画です。先日ツタヤで借りて、教会で映画鑑賞会をしました。映画のなかで神さまが登場します。その神さまが、このようなことを言っていました。

「天地創造の神として、自分が創ったものは、ほとんど自信作なんだ。ただし失敗作も残念ながらある。その一つは服だね。なぜなら『ポケット』があるから」。

「ポケット」、なるほど。これは意味深な台詞だと思いました。「ポケット」、私たちはどういうときに使いますか。なくすと困るもの、電車の切符とか、チケットとかをしまします。でも大切なものをしまうだけではありません。隠すときもあります。見られたくない。知られたくない。そういうものも「ポケット」に入れます。「ポケット」は、いろんな使い方ができるので、「ポケット」に入れるもの、入れてはいけないもの、この見極めが大事です。

私たちは「存在そのもの」に価値があると聖書から学びました。そして「人一人ハ大切ナリ」の新島襄の言葉も知りました。一人ひとりの個性、これは神さまからいただいた賜物です。この賜物を皆さんは「ポケット」にしまっていないか。皆さん、神さまからいただいた賜物を「ポケット」に入れてしまわないようにしてください。

2013年4月17日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録